本づくりに明滅する人の群れ

ほれぼれする本だ。木版画だろうか、表紙カバーに印刷された黒が、黒々と光って見える。天の方から地に向かい、蛇行しながらゆったりと流れてくる川の真中に銀箔で『新宿書房往来記』の文字が浮かび上がる。川の上流に、笠をかぶった人の姿。農夫だろうか。空には鳥が飛び交い。農夫の後ろについて歩いているのは、馬の親子だろうか。さらにその後ろには、手をつないだ二人。川のほとりには、花が咲き、木が植えられてあり、また幾人かの人の姿が見える。カバーの表４は太陽と虹か。ほれぼれしながらカバーを外し、背を中心にして本を水平まで開くと、装画全体が見え、息をのむ。ああ、こういう絵柄だったのか。と。よく見れば、表１と表４で共通の部分があることに気づく。本をガラス盤に載せ、表紙の装画をコピーしてカットし、重なり部分を確かめたら、ほぼ六七ミリ。共通の部分があることにより、それを見る目は、幾度か横移動し、することで、描かれた人と動物、植物のいのちの営みが、川の流れと相まって、時とともに変移すると感じられてくる。装丁は、長田年伸さん。装画の木版画は、ニアさん。装丁の磁力に引き寄せられ、誘われるまま、本のページをめくる。

この本は、新宿書房のホームページに公開されたコラムと、新聞、雑誌などに発表された文章をもとに、加筆訂正が施され、新宿書房五十年のクロニクルの輝きを、分類・整理し、一書にまとめたものである。編集は、上野勇治さん。

あとがきに記された著者の言葉が、編集者の仕事を端的に伝えているようだ。

いわく、「今年の春のある日、「たいへん遅くなりました」と港の人の上野さんが分類・整理し、プリントした原稿が届いた。そしてすぐに初校ゲラの出校がこれに続く。八つの章に分けられているではないか。見事な編集（原稿でない）である。」（本書三一二頁）社主であり編集者であり、今回は著者である村山さんが瞠目した章立てとは？　「百人社の三冊から始まる」「田村義也と、巡る人びと」「杉浦康平山脈」「編集単行本主義」「空と声の記憶」「映画・村山四兄弟」「山の作家・宇江敏勝とともに歩む」「小さな美術館、未来へ」の八章だ。そのうちの「編集単行本主義」に、二〇一九年一月に亡くなった松本昌次の言葉が引かれている。「集め本といってバカにしてはいけない。著作の断片を組みたてて、構成、演出することこそ、編集のダイゴ味なんです。モザイクのように組みたてて、欠けているところを書き足してもらったり、重複するところを削ってもらったり、結果的に、著者も予想しなかった広がりのある論文集、評論集が生まれるのです。」（本書一一〇頁）著者の村山さんが「あとがき」で記すように、上野さんは、村山さんのコラムを素材にして、それを実際にやった。八つある章は、興味のあるところから読み始めて一向にかまわないとは思うけれど、アタマから通して読むと、「著者も予想しなかった広がり」の野（や）に立たされていることに読者は気づく。

この本はまた、本づくりの場においてかかわった多くの人の追悼集ともなっている。人と人との、時にはぶつかることもあるけれど、豊かなかかわりの中から、それが肥やしとなって、本は生まれる。「田村義也と、巡る人びと」の田村義也は、編集装丁者と自ら名乗っていたという。義也の弟に、まちづくりで

有名な田村明がいた。彼の『まちづくりの実践』（岩波新書）に、それぞれの土地には土地の霊、「地霊」があるというけれど、自分が言う地霊は、アニミズム的な意味のそれではなく、「後世への「おくりもの」として「まちづくり」を行ってきた多くの人々の思いが「地霊」になってゆくということである」（同書一九六ー一九七頁）と記されている。この「まち」を「本」に替えれば、田村義也の本づくりの要諦と響き合う。義也の仕事場はどんな様子だったのか。「床には足の踏み場もないほどの本やコピーした紙が散乱し、机の上の崩れそうな本やゲラの山」（本書五二頁）は、本づくりの戦場さながらだ。義也が、旧約聖書のユシュアに因（ちな）むことを、弟の千尋さんが記している（ＮＰＯ法人田村明記念・まちづくり研究会のホームページ）。黒人霊歌に歌われ、ジャズのスタンダードナンバーとしても知られる『ジェリコの戦い』のジョシュア＝ヨシュアだ。義也はこの世の何と戦っていたのだろう。

言わずもがなのことながら、この世に生を享けた人は、例外なくいつかはこの世を去っていく。しかし、この世で成した営みから発せられるひかりは、本という形で後世へのおくりものになるのだと、この本を読み、静かに、深く考えさせられた。きょうも明日もつづく本づくりに、光をあてられ、背中を押してもらった。

巻末の「新宿書房刊行書籍一覧　１９７０ー２０２０」も、ていねいなつくりになっており、それを見ると、装丁家にして、昨年七月に惜しくも亡くなった我が畏友・桂川潤装丁の本が、数えたら二〇冊あった。